

逆境への挑戦！

～「組み合わせ操業」と若い力で乗り越えろ～

甌島漁業協同組合 元山 浩一

1. 地域の概要

私の住む下甌町は、薩摩半島の西方約50kmに浮かぶ甌島列島の下甌島南部に位置し、人口約2,600人の町である(図1)。平成16年10月に本土の一市四町と甌島の四村が広域合併し、下甌村から薩摩川内市下甌町となった。

町内には西海岸に面する内川内、瀬々野浦、片野浦、東海岸に面する長浜、青瀬、そして最南端の手打の、6つの集落がある。島の中央には高い山々がそびえ、各集落は互いに遠く隔てられている。私が住んでいるのは手打集落である。

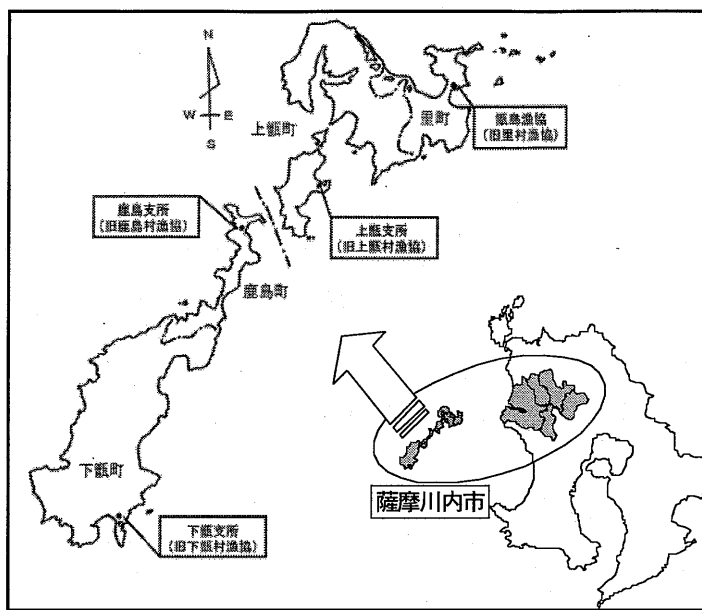


図1 位置図

2. 漁業の概要

私の所属する甌島漁協は、平成15年10月に4つの漁協(里村漁協, 上甌村漁協, 鹿島村漁協, 下甌村漁協)が合併し、県内で2番目の広域合併漁協となった。組合員数は県内で最も多く、平成17年度現在、1,654名(正組合員392名, 准組合員1,262名)である。

甌島ではキビナゴ刺網, カジキ流し網, 定置網, 一本釣り, 曳縄等の沿岸漁業が盛んで、平成17年度の取扱実績は1,707トン, 9億1,700万円である。このうち、キビナゴ刺網が総水揚げ金額の約3分の1を、定置網漁業が約4分の1を占めている(図2)。魚類養殖及び定置網を除くと、下甌以外の3地区がキビナゴ刺網主体であるのに対し、下甌地区は小型底曳網, カジキ流し網, 一本釣り, 曳縄等、集落ごとに特色ある様々な漁業が営まれているのが特徴である(図3)。

3. 就業までの経緯

県立鹿児島水産高校の無線通信科を卒業した私は、通信の技術を活かして東京に就職したが、満員電車で揺られて毎日通勤する生活にはどうしても馴染めず、また故郷での海の仕事へのあこがれを捨てることができなかつたため、会社の引き留めや両親の大反対を押し切って、平成5年、23歳の時にUターンした。

島に戻ってからは、父の指導の元、キビナゴ刺網, カジキ流し網, 曳縄をメインに3年

間修行。もともと、学生の頃から夏休み時にはキビナゴ漁のアルバイトをしていた関係で、さほど漁をすることに抵抗はなかったが、最初の頃は技術が追いつかず、魚群探知機の見方や刺網の投入のタイミング、網振り等の作業が思うようにいかず、日々格闘する日が続いた。ある程度の漁ができるまでには2年ほどかかった。

そして、就業して3年目の26歳の時に農林漁業金融公庫資金を借り入れ、新船建造を機に独立し、現在は父と二人で操業を行っている。未だに父の技術には及ばない部分もあるが、自分なりに日々技術を磨いている所である。

4. 組み合わせ操業の経緯と現状

着業した当初はキビナゴ刺網・カジキ流し網・曳縄をメインに、時期的にタイ・カンパチ釣り、カワハギすくい網を行っていた。

私の操業において最も大きなウェートを占めるキビナゴ刺網漁は、着業当時は量も捕れかつ値段も良く、高いときは1箱(約15kg)2~3万円以上することもあった。年間の平均でも平成5年の鹿児島市場ではキロ600円となっており(図4)、キビナゴだけでもある程度の収入が見込まれていた。これに、8月中旬から11月にかけて甑近海にやって来る、“秋太郎”の愛称で知られるバショウカジキの流し網漁業と、手打から宇治・草垣周辺までの海域でカツオ・ヨコワ等の曳縄漁業を組み合わせれば十分な収入が見込まれていた。特に平成11年度に、それまでの村単独の浮魚礁にかわって県の大型の浮魚礁が手打の西沖に設置されてからは、曳縄漁業の操業効率は飛躍的に向上した。

しかし、年々下甑地区におけるキビナゴの漁獲量は減少し、着業した当初の平成5年には下甑地区全体で278トンあった漁獲量も平成16年には105トンとなった(図4)。加えてキビナゴ単価も減少傾向であり、特に平成17年10月以降は全ての月で前年を下回っており、18年度はキロ300~400円で推移し、11月にはキロ219円と、漁協合併後の最安値を記録している(図4, 5)。頼みのカジキ漁も来遊量の年変動が大きく漁模様が予測できない。曳縄漁業も同様に魚価の低迷が続き、だんだんこれら3つの組み合わせだけでは厳しくなってきた。

その結果現在では、以前から時期的に行っていたタイ・カンパチ釣り、カワハギすくい網の比率を高め、時期によって様々な漁法を組み合わせる操業している(表1)。漁業種別の依存度(金額ベース)は、年によって変動はあるが、平成17年度を例にとると、キビナゴ刺網6:カジキ流網1.5:曳縄1:一本釣り1:すくい網0.5といったところである。

漁獲物の水揚げに関しては、主に串木野港から業者に頼んで鹿児島市場まで運んでもらう方法と、阿久根港に水揚げする方法がある。カツオやヨコワなど、漁獲物やその日の相場によっては牛深港や枕崎港に水揚げする場合もある。キビナゴについては、地元加工場揚げと本土揚げが半分ずつくらいである。本土揚げの方が単価が幾分よいが、燃油を考えると加工場揚げの方が収益性が高い。なお、地元では需要に限られるため、販売を目的とした地元揚げはほとんど行わない。

組み合わせ操業を行ううえで自身が気を付けていることは、宇治・草垣方面に下るときに、漁模様や市況を見計らいながら、沖でいつでも柔軟に他の操業に切り替えられるよう常に複数の漁具を搭載しておくことと、燃料費を計算しながら出荷先を選択していることである。特に平成16年から続く燃油高騰は、平成18年11月現在では価格上昇に歯止

めがかかっている状況であるが、依然として高止まりしており、苦しい漁業経営を強いられている状況である（図5）。拠点とする手打周辺漁場、又は宇治・草垣周辺、大型浮魚礁周辺から各市場までの距離とその日の市況を見計らいながら水揚げ場所を決定しなければならない。少々の市場値の差は燃料費で直ぐに逆転してしまう。時には翌日のセリになってしまうことを覚悟のうえでフェリーで鹿児島島に送る場合もある。地理的に不利な条件を抱える甑島の中でも最も本土から遠く離れており、厳しい状況下にある手打地区の漁師にとって、燃油高騰のダメージは甚大である。

5. 主な漁業種類の操業内容と資源管理等について

私が主に操業している各種漁業の内容と資源管理の取り組み等を以下に紹介する。

(1) キビナゴ刺網漁業

私の操業の基本となる漁業であり、周年操業するが、メインは子持ち時期である5～7月である。魚群探知機でキビナゴの群れを探して錨留めし、集魚灯を灯してキビナゴを集める。キビナゴの群れが灯火の周りを回り始めたら、魚群を遮断するように網を入れる。網を引き上げ、網に刺さったキビナゴを振り落とす。このとき、あまり力任せに網を振りすぎると魚が傷んだり頭がちぎれて値が下がるので、無理に振り落とさないよう丁寧に、かつ素早く作業するよう心掛けている（これにより、自身のキビナゴは他者のキビナゴに比べ魚の傷みも少なく、価格もやや高めで取り引きされている。（図6））。この作業を一晚に3、4回から多いときで8回くらい繰り返す。

キビナゴ刺網漁業に関しては、資源の維持増大、価格の維持等を目的として、平成5年に「甑島地区キビナゴ資源管理協議会」が設立され、島全体で資源管理に取り組んでいる。資源の分布等の違いから地区によって若干取り組み内容が異なり、現在手打地区では、出港は午前2時、日曜・祭日は休みと決めている。また、産卵期である5月から7月まで手打湾（18年度からは佐之浦）を禁漁区に設定している。さらに手打地区では、単価を高くするため、甑島の他の地区よりも大きな目合いを使って大型のキビナゴを獲るように工夫している。

(2) カジキ流し網漁業

ご存じ、鹿児島島の秋の“旬の魚”，バショウカジキである。毎年、お盆前になるとそわそわし始めるのが常である。まずは手打地区の漁師が探索に出て、獲れ出すと他の地区の船が動き出す、というように、手打の漁師はカジキ漁に関してはパイロット的な役割を担っている。しかし、今年の漁期は、燃油高騰の影響から、“我先に”と飛び出す船がなかなか現れず、しばらく悶々とする日が続いた。

カジキの跳ねや鳥群れなど、あらゆる情報を元に各自漁場を決め、網を投入、その名のおり網と共に船を流しながら、1時間おきに網にカジキがかかったかどうかを見回る。日没から日出までこの作業を繰り返す。水揚げは、量がまとまれば串木野港から業者に頼んで鹿児島市場まで運んでもらうが、まとまらなければフェリーで鹿児島島に送る。年によって、また日によっても好不漁の波が激しく、また獲れ過ぎるとすぐに値が下がるので、収入の見通しを立てにくい面があるが、一晚に数十万円にもなる場合があるのが魅力である。

カジキ流し網漁業に関しては、資源の有効利用を図るため、平成12年に「鹿児島県かじき流し網漁業漁協連絡協議会」が設立された。その中で、定期休漁日の設定、臨時休漁日の設定、反数制限などの取り組みについて協議がなされ、現在、月2～3日の定期休漁日の設定、網の長さは8反（×100m＝800m）までと決められている。また、同連絡協議会の活動趣旨を甕島内に浸透させるため、平成13年に「甕島地区かじき資源管理協議会」が設立され、資源管理を円滑に進める体制が構築されている。例年、上記キビナゴと同日に当該資源管理協議会を開催しており、甕島全島での漁業者の話し合いの場が持たれている。

(3) 曳縄漁業

甕周辺から宇治・草垣周辺、手打西沖大型浮魚礁周辺で、1～5kgのヨコワ・シビ・カツオ・ハガツオ等を狙う漁法である。ヨコワ・シビはバクダン、カツオ・ハガツオはヒコーキを用いる。周年対象となるが、メインは12～3月である。

上述のとおり、県の大型浮魚礁が設置されてからは、流失しやすかった村単独の浮魚礁に比べ長期間にわたり浮魚礁周辺での操業が見込めるようになり、操業効率が飛躍的に向上した。ちなみに平成12～17年度の同浮魚礁における漁獲実績は、15～49トン、8～27百万円となっている（図7）。できればこのような大型の浮魚礁をあと2～3基設置して貰えば、漁場探索に要する労力と経費がさらに軽減され、燃油高騰にあえぐ我々下甕地区の漁師は非常に助かるのだが…。この場を借りて強く要望したい。

なお、水揚げは、串木野から鹿児島市場へ運搬、フェリーで鹿児島送り、牛深揚げ、枕崎揚げの4通りがある。手打周辺で2月にブリ（10kg前後）曳縄をすることもある。

(4) その他漁業

上記の他に、一本釣り、カワハギすくい網漁業を組み合わせる操業している。

各漁業種類の操業時期、操業海域等については表1のとおりである。

表1 月別操業実態

漁業種類	月												主な操業場所	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
キビナゴ刺網														・手打地区の漁業権内 ・宇治群島
カジキ流し網								—	—					・下甕町周辺沿岸域 ・宇治群島周辺
ヨコワ・カツオ曳縄														・下甕町周辺沿岸域 ・宇治・草垣周辺 ・国庫大型浮魚礁周辺
マダイ釣	—	—	—											・手打周辺海域
カンパチ釣(ジグ)		—	—											・宇治・草垣・鷹島周辺
カンパチ釣(エサ)								—						・宇治・草垣・鷹島周辺
ウスバハギすくい網														・下甕町周辺沿岸域 ・宇治・草垣周辺

6. 今後の課題とこれからの甑島の水産業発展の可能性～私の決意～

(1) 燃油高騰対策

燃料費節減のため、船底のこまめな掃除やエンジンのメンテナンスに気を配る他に何か自分でできることはないかと考え、発光ダイオード集魚灯(図8)がキビナゴ刺網漁でも使えるかどうか、現在、メーカー及び鹿児島大学水産学部と連携して試験を進めているところである。しかし、沿岸小型漁船向けの商品はまだ開発段階で市販されていないので、少しでも早く実用化できるよう、キビナゴ業者の一人として協力を続けていきたい。

(2) 漁協合併と青年漁業者交流会

甑島漁協が合併したメリットを生かし、各地区の青年漁業者間の交流が活発になってきている。平成18年3月に初の青年漁業者交流会が開催され、11月には第2回目の交流会が開催され、今後に向けて活発な意見交換がなされている。今後、青年漁業者の地域間交流・連携をさらに促進していくことにより、さらには地区商工会青年部等との連携の輪を広げることにより、各地区・各漁業種の強みを活かした販売、観光、町おこし等の方策を検討していくことで、水産業のみならず、甑島全体の活性化を図っていきたい。

(3) 離島漁業再生支援交付金事業の有効活用

平成17年度から始まった同事業を活用して、手打漁業集落では海岸清掃や密漁監視等に取り組んでいる。今後は、バショウカジキの内臓を使った加工品の開発など地域の特色を生かした新たな取り組みが計画されており、先進地視察を重ねたり、県水産技術開発センターの協力なども得ながら、集落の発展のために皆で力を合わせて頑張っていきたい。

(4) 食育・地産地消の推進による地元消費の拡大

現在は地元での需要に限られているのでほとんど地元揚げは行っていないが、地元でも需要があればわざわざ本土まで出荷する必要はなくなる。そこで、地元の旅館や観光業と連携するなど、地元消費を伸ばすような体制を検討していく必要がある。また、島に生まれ育った人でも、魚がさばけないという人は意外と多い。私たち漁師が自ら講師となり、最近注目されている“食育”や“地産地消”を推進することによって、地域の方々に、もっともっと地元の新鮮で豊富な魚介類を食べてもらえるようにしていきたい。

(5) その他

前述のとおり、各集落が互いに遠く隔てられている下甑町であるが、3年後には手打トンネルが開通する予定となっており、手打～青瀬間の交通の便は格段に改善されることとなる。またこのたび、甑島住民の悲願であった藺牟田瀬戸架橋が、10年後の完成を目指して着工されることとなった。また合併後の薩摩川内市では、①薩摩川内・こしきお魚まつり、②川内・甑とれたて市、③甑島モニターツアー(ブルーツーリズム推進事業)、④特産品開発フォーラムなど、甑島の歴史や伝統、豊かな自然を活かした新たなイベントが開催されるようになった。このように、現在の甑島は、逆境にさらされているばかりではなく、地域振興・水産業振興に向けた“追い風”も吹いている。このチャンスを生かし、甑島全体がさらに一体感を高めて活性化を図っていけるよう努力していきたい。

7. 最後に

以上のとおり、手打地区の漁師は、地理的に不利な条件を抱える甌島の中でも最も厳しい状況下であり、その中で何とか歯を食いしばって耐えているというのが正直なところである。しかし、だからといってただ泣き言ばかり言っていては始まらない。私は、この大好きな故郷の海と魚を相手に仕事ができることに喜びと誇りを抱き、未来に夢と希望を持って、組み合わせ操業にさらに磨きをかけ、また若い力と行動力で、甌島の水産業を盛り上げていけるよう、これからも益々頑張っていきたい。

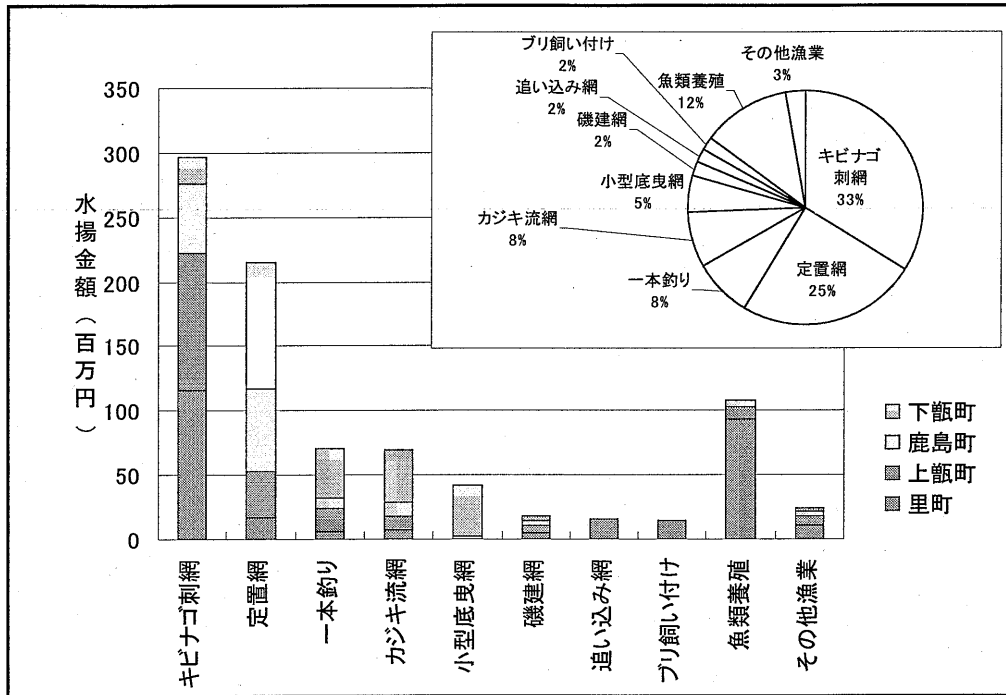


図2 甌島漁協における漁業種別水揚げ金額 (平成17年度)

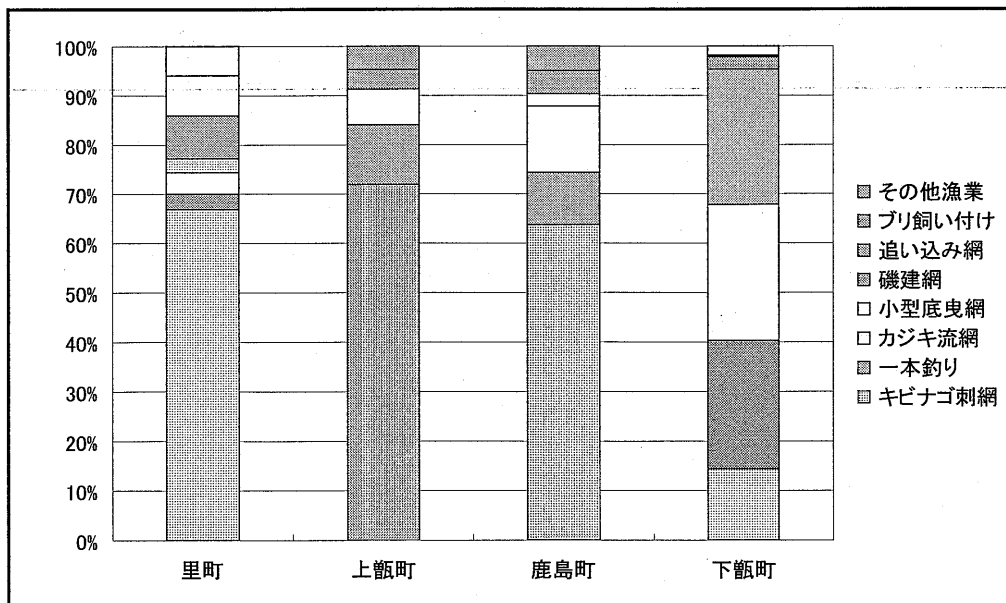


図3 地区別漁業種別水揚げ金額割合 (平成17年度)
(魚類養殖・定置網漁業を除く)

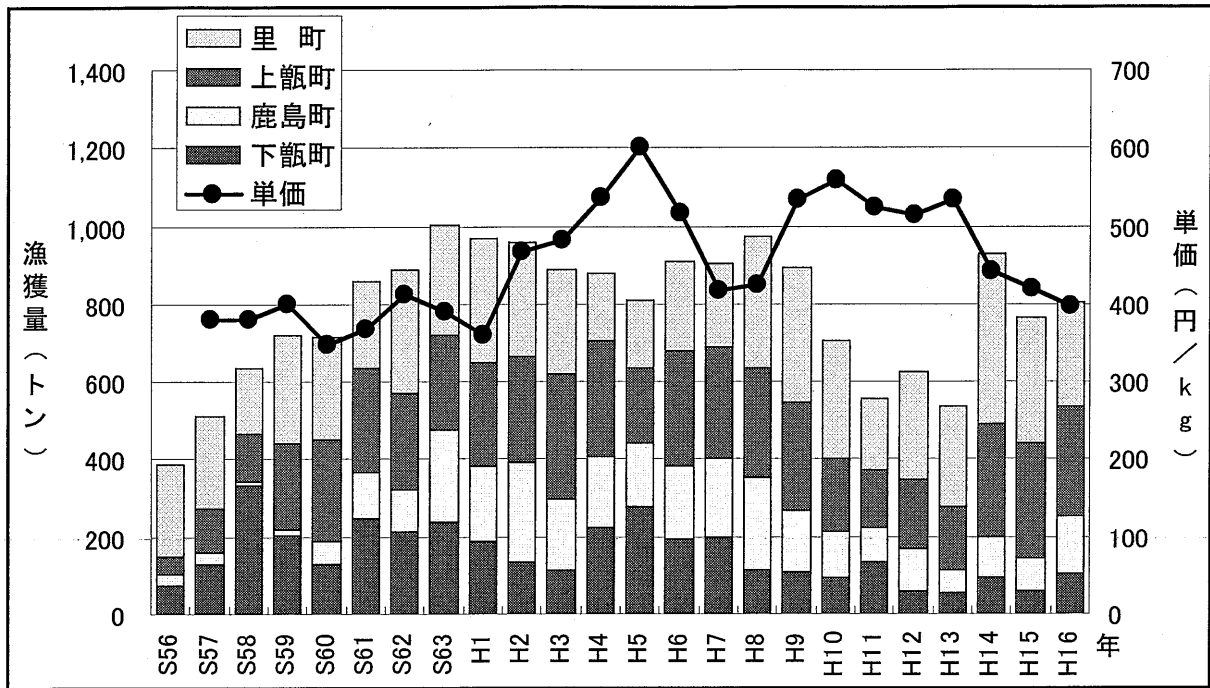


図4 地区別キビナゴ漁獲量と鹿児島市場におけるキビナゴ平均単価の推移

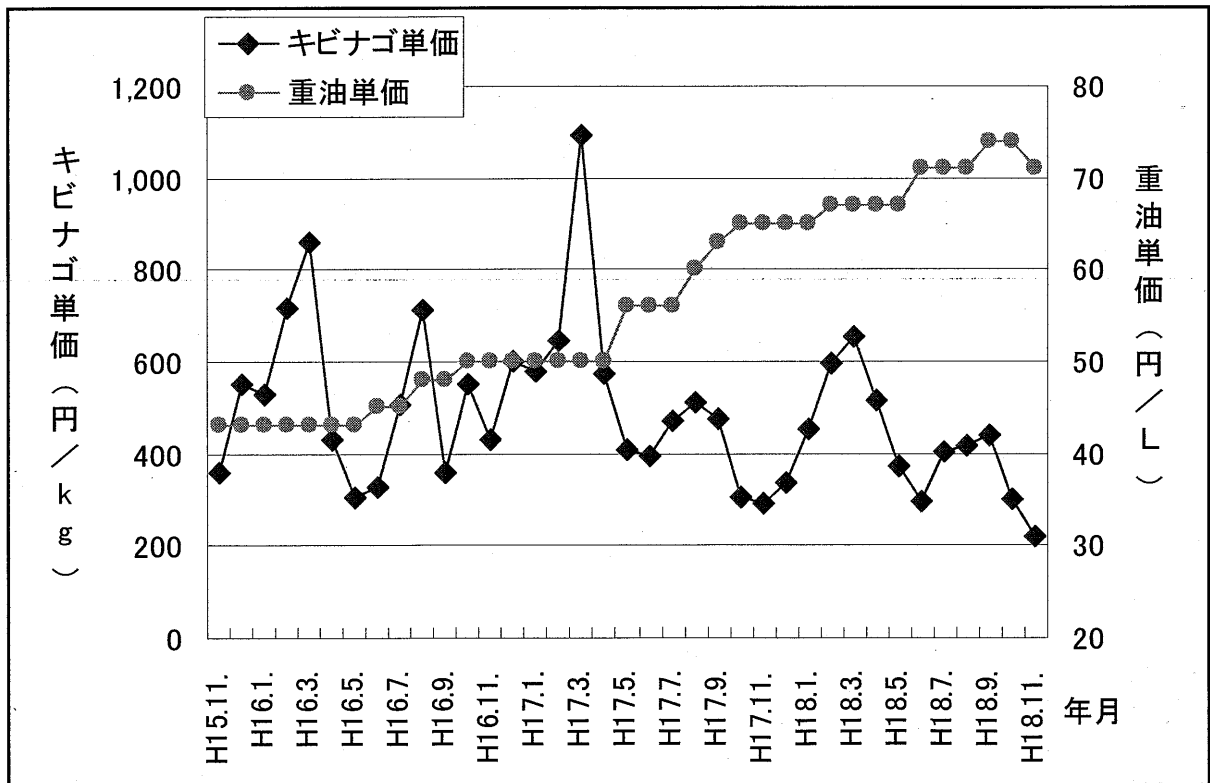


図5 合併後の甑島漁協所属船のキビナゴ平均単価と甑島漁協における燃油価格の推移

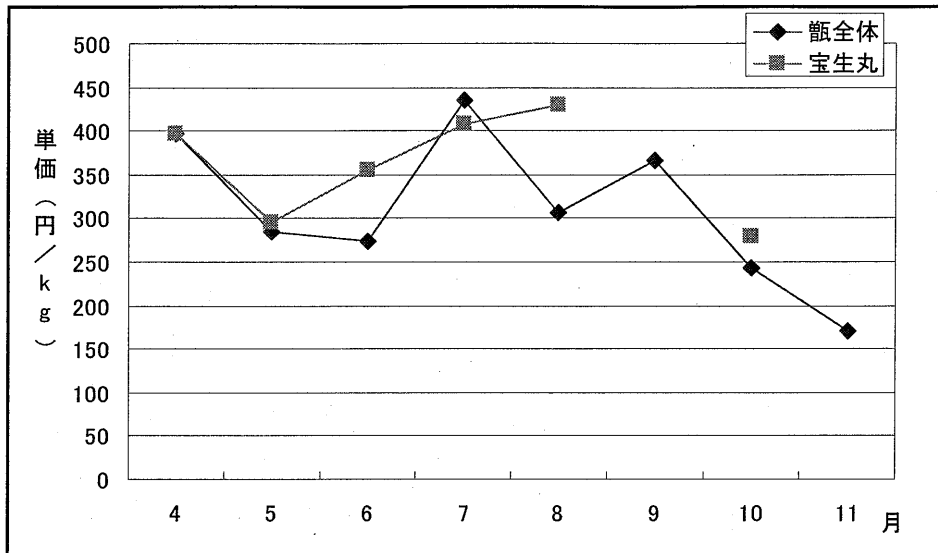


図6 キビナゴ平均単価の比較 (平成18年度阿久根港出荷分)

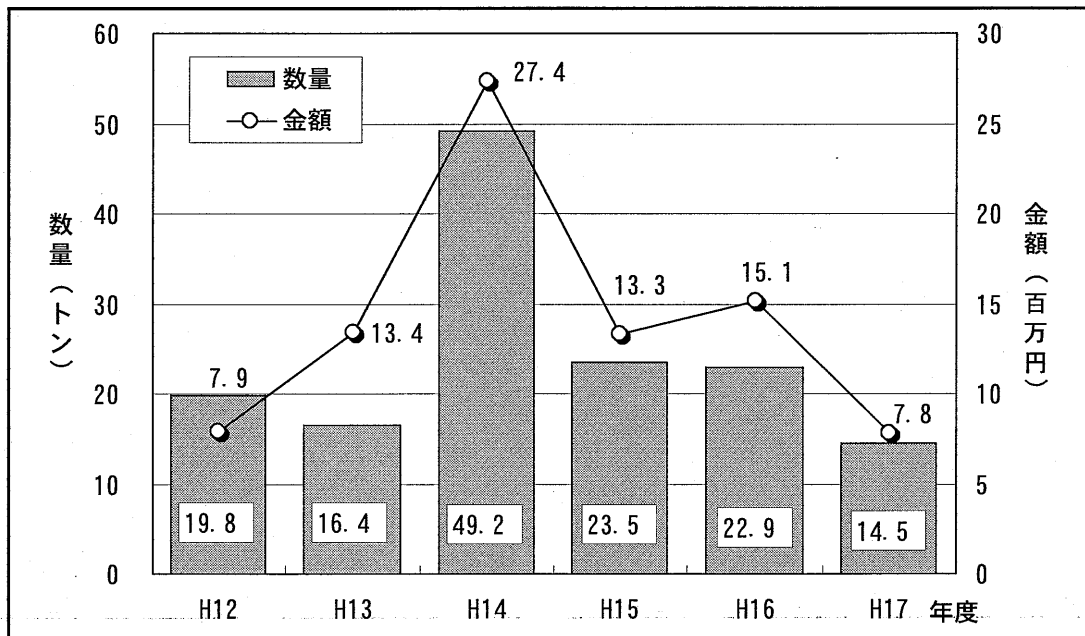


図7 下靛沖県大型浮魚礁における漁獲実績

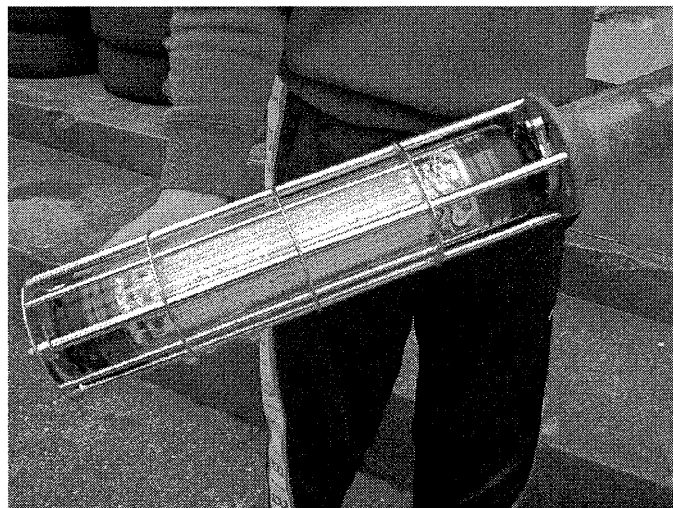


図8 発光ダイオード集魚灯